**身体拘束廃止を進めるための18のチェックポイント**

（1）「身体拘束廃止」をトップが決意し責任を持って取り組んでいるか。

（2）「縛らない暮らしと介護」の推進チームを作るなど体制作りをしているか。

（3）各職種の責任者がプロ意識を持ってチームを引っ張り、具体的な行動をとっているか。

（4）「身体拘束とは何か」が明確になっており職員全員がそれを言えるか。

（5）「なぜ身体拘束がいけないか」の理由を職員全員が言えるか。

（6）身体拘束によるダメージ、非人間性を職員が実感しているか。

（7）個々の拘束に関して、業務上の理由か利用者側の必要性かについて検討しているか。

（8）全職員が介護の工夫で拘束を招く状況（転びやすさ、おむつはずし等）をなくそうとしているか。

（9）最新の知識と技術を職員が学ぶ機会を設け積極的に取り入れているか。

（10）利用者のシグナルに気付く観察技術を高めていく取り組みを行っているか。

　　（例：観察による気付きの話し合い、観察記録の整備、観察日誌の工夫）

（11）各職員が介護の工夫に取り組み、職種をこえて活発に話し合っているか。

（12）決まった方針や介護内容を介護計画として文書化し、それを指針に全員で取り組んでいるか。

（13）必要な用具（体にあった車椅子、マット等）を取り入れ、個々の利用者に活用しているか。

（14）見守りや、利用者と関わる時間を増やすために業務の見直しを常に行っているか。

（15）見守りや、利用者との関わりを行いやすくするために環境の点検と見直しを行っているか。

（16）「事故」についての考え方や対応のルールを明確にしているか。

（17）家族に対して拘束廃止の必要性と可能性を説明した上で、協力関係を築いているか。

（18）拘束廃止の成功体験（職員の努力）を評価し、成功事例と課題を明らかにしているか。